

第二講 『十訓抄』

次の文章を読んで、後の設問に答えなさい。

大納言行成卿、いまだ殿上人にておはしけるととき、実方中将、いかなる

いきどほりかありけむ、殿上に参り合ひて、言ふこともなく、行成の冠を

打ち落として、小庭に投げ捨てけり。行成、少しも騒がずして、主殿司を

召して、「冠、取りて参れ」とて、冠して、守り刀よりかうがい抜き取り

て、鬢かいつくろひて、居直りて、「いかなることにて候ふやらむ、たち 5

まちにかうほどの乱罰にあづかるべきことこそおぼえはべら A。その

ゆゑをうけたまはりて後のことにやはべるべからむ」と、言うるはしく言

はれけり。実方は、しらけて逃げにけり。折しも、半部より、主上（帝）

御覧じて、「行成はいみじき者なり。かくおとなしき心あらんとこそ思は

ざり B」とて、そのたび蔵人の頭あきたりけるに、多くの人を越えて 10

なされにけり。実方をば、中将を召して「歌枕、見て参れ」とて、陸奥の

国にぞ流しつかはされ C。やがてかしこにてうせにけり。実方、蔵人

の頭になられでやみにけるを恨みにて、執とまりて、雀になりて、殿上の小

台盤に居て、台盤を食ひけるよし、人言ひけり。一人は忍をたまたざる故

に前途を失なひ、一人は忍を信ずるによりて褒美にあへるたとへなり。

(注) ※主殿司…宮廷の役人で、庭の掃除などを取りしきった。

※かうがい…髪をかきあげる道具。

※半蔀…板を張った格子戸。

※歌枕…歌の中に詠まれた諸国の名所。

※小台盤…小さな食卓。

問一 空欄A～Cには、それぞれ()内の語が入る。文中に適應する活用形に直して、書き入れなさい。

A	(ず)
B	(き)
C	(けり)

問二 うるはしく、いみじき、おとなしき、やがて、執とまりてについて、それぞれ文中に適應する意味を、簡潔に書きなさい。

ホ	ハ	イ
	ニ	ロ

問三 傍線部aおよびbの「二人」は、それぞれ具体的に誰のことか。人名で書きなさい。

a
b

問四 問題文全体から作者はどういうことを戒めているのか。適当なものを次の中から選び、番号で答えなさい。

- 1 君臣は温情をもって交わるべきこと
- 2 堪忍の徳の重要なこと
- 3 君主は臣下の賢愚をよく知るべきこと
- 4 人を悔るべきでないこと

問五 次のA群およびB群の中から、『十訓抄』ともっとも関係の深いものを、それぞれ一つずつ選び、番号で答えなさい。

- | A群 | | B群 | |
|----|------|----|--------|
| 1 | 歌論書 | 1 | 大和物語 |
| 2 | 擬古物語 | 2 | 山家集 |
| 3 | 歴史文学 | 3 | 無名草子 |
| 4 | 説話文学 | 4 | 愚管抄 |
| 5 | 随筆文学 | 5 | 宇治拾遺物語 |

A

B

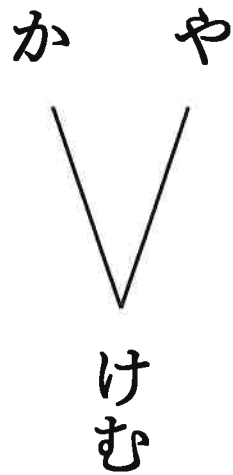
かん だち め
上達部 (1～3位) → [く ぎょう公郷ともいう]

てんじょうびと
殿上人 (4～5位) → [うえ びと上人・うん かく雲客ともいう]

じ げ びと
地下人 (6位以下)

へちよつと覚えておこう！く

第二講



く タダロウカ

す

ものす

代動詞

ゐる (ワ行上一)

居る ↓ いる ・ すわる

率る ↓ 引き連れる

ゆゑ 【故】

① 原因・理由・事情

② 趣・風情・由緒

③ (接助的) く によって ・ く ので

うるはし【麗し】

- ① きちんとしている
- ② (整っていて)美しい
- ③ 親しい・仲がいい
- ④ 近づきにくい

高貴な人物―「る・らる」 ↓ 尊敬

おとなし【大人し】

- ① 大人びている
- ② 思慮分別がある
- ③ おもだっている

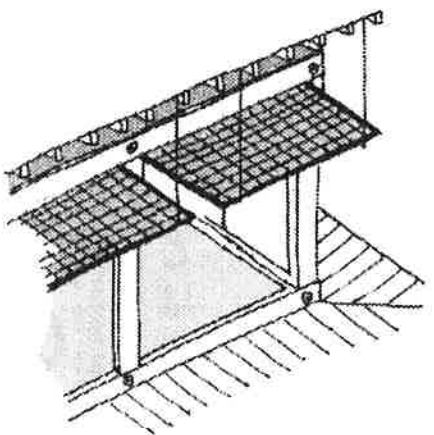


いとけなし【幼けなし】
いはけなし

幼い・あどけない

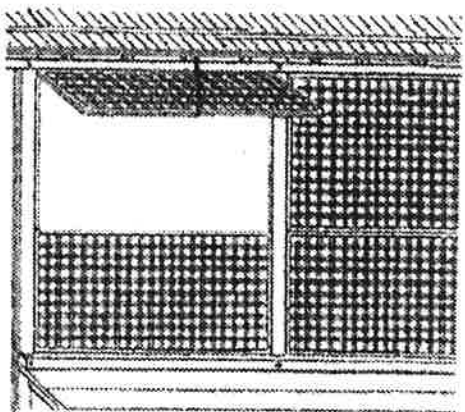
やがて

- ① そのまま
- ② すぐに



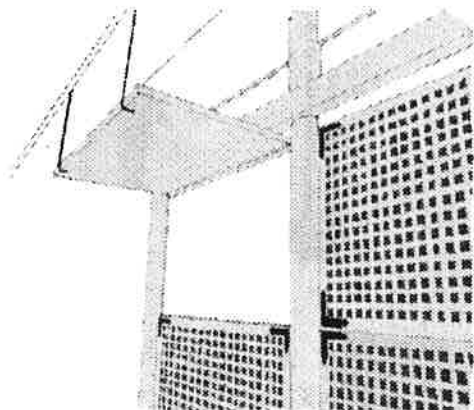
裏側から板を張った格子。

蒔しどみ



上部分にのみ裏側に板を張った格子。

半蒔はしどみ



今でいう窓。

格子こうじ

あさましくなる
いたづらになる
うす【失す】
はかなくなる
むなしくなる
死ぬ

cf.

かくる【隠る】
みまかる【身罷る】

死ぬ

—「る・らる」+打消↓可能

未然+で
ナイデ

大納言行成卿がまだ殿上人でいらつしゃつた時、実方中将は、どのような怒りがあつたのだろうか、(宮中の)殿上(の間)に参上し(行成と)出合つて、(〓殿上の間で)行成と顔を見合わせた(途端)、(〓)何も言わないで、(中将は)行成の冠を叩き落して、庭に投げ捨てた。(しかし)行成は少しも騒ぐことなく(〓あわてないで)、主殿司をお呼びになつて、「冠を取つて参上せよ(意識しようぜ、冠を捨て来い)」と(言つ)て、冠をかぶつて(または、つけて)、守り刀からくしを抜き取つて、髪の毛を整えて、座り直して、「どういふことでございますのしょうか(ちよつと硬いから意識して、どういふことでございませうか)、いきなりこれほどの乱暴を受けねばならないようなことはございませぬ。(この)ような仕打ちは)その理由をうけたまわつて(〓その理由をお聞きして)、(その)後のことであるのが当然でしょう(わかるか?ちよつとこは難しい。ようするに、授業でも言つたように、理由をうかがつた後に決着をつけましようと言つてゐるんだ)」と内容をきちんとおつしやつた(〓理路整然とおつしやつた)。実方は、間が悪くなつて逃げてしまつた。ちよつどそのとき、小さな窓から、帝(〓天皇だよ)がご覧になつて、「行成はたいそうすばらしい(または、立派な)ものである。このように『思慮分別な心(思慮分別がピンとこない人は、考え深い心)があるだろう』とは思わなかつた」と(おつしやつ)て、そのとき蔵人の頭が空いていたので(〓欠員が出たので)、多くの人を超えて(行成)を任命なさつた。(一方)実方を、中将をお呼びになつて(ここも意識、その後を読むと陸奥の国に流しているから、中将の位を取り上げなさつて)、「歌枕を見て参れ」と(おつしやつ)て、陸奥の国(〓東北地方の青森、岩手)に流しつかわしになつた(〓お流しになつてしまつた)。そのままその地で亡くなつてしまつた。実方は、蔵人の頭になることができなで終つてしまつたのを恨みとして(ちよつと意識しよう、恨みに思つて)、執念が(この世に)残つて、すずめになつて(ウソだよ!)、(殿上の間に)戻つて来て)殿上の小台盤にとまつて(または、とどまつて)、食卓の飯を食つたと言ふことを人が言つた。実方は、こらえる事をしなかつたために家柄でなれる官職をなくし、行成は、忍耐の(大切さ)を信じたために好運にあつた(または、褒美を受けた)という例である。